『捷解新語』における文法的形態について
――文末名詞構文を中心に――

福　沢　将　樹

1　『捷解新語』とは

1676 年、李氏朝鮮において刊行された日本語のテキストである。先行研究によれば[1]、著者の康遇聖は 1581 年、慶尚南道「晋州」に生まれ、秀吉の朝鮮出兵の際、1592 年に捕らえられ、数え 12 歳で日本に連行される。以後 10 年間ほど日本で過ごし、1601 年頃朝鮮に帰国。帰国後、1609 年に「訳科登第」する。「原刊本」と呼ばれる 1676 年刊の印刷本は、著者康遇聖の死後に成ったものと見られる。その後 18 世紀にかけて幾度かの改修を経、体裁に少なからぬ変更がある。

対話文および書簡文を収めるが、特に対話文は当時の口語文体が朝鮮語との対訳で記される。平仮名（若干の漢字交じり）の日本文が、おおよそ十数字ごとの「句」に区切られており、その句の末尾[2]に朝鮮語訳がハングル（若干の漢字交じり）で記される。日本語と朝鮮語は語順がほぼ同じなので、「句」ごとに記された対訳はそのまま朝鮮語文として読み下すことができる。また日本文の一文字ごとに右傍らにハングルで音注が加えられている。音注と対訳本文は、仮名本文成立後に、原著者（康遇聖）以外の人物の関与があると見られている（李 1991）。

著者の推定在住地からして京阪方言が中心ではないかとされるが、九州・対馬辺の方言や朝鮮語訛りの混入も見られるとされる。

本書の研究史について、朴（2013）は、音韻、語彙、敬語などの研究は進んだが統語論の研究が比較的遅れていることを指摘する。本稿は統語論の一つの試みである。

1）以下森田（1985）に多くを負う。また拙稿（2012）にも同様のあらましを記した。

2）「原刊本」では句の末尾に記されているが、「改修本」「重刊改修本」では本文の左傍に記す。名詞・助詞なども両言語の語順はよく対応するので、このような体裁の対訳表示が可能である。

2　文末名詞

現代日本語には、新屋（2014）［初出 1989］の「文末名詞」構文、角田（1996）井上（2010）の「体言締め文」或いは角田（2011）の「人魚構文」と呼ばれる構文がある。角田（2011）によると、日本語のほか現代韓国語などには存在するが、世界的には珍しいとされる。韓国語でも、構文自体は存在するものの、井上/金（1999）はものによっては「かなり不自然」とする。

［太郎は名古屋に行く］予定だ。
［太郎は今本を読んでいる］ところだ。
［外では雨が降っている］模様だ。（以上 3 例、角田（2011）用例）

新しい校舎は今年中に完成する予定だ
Say kyosa-nun olhay-an-ulo wanseng-toyl yeyceng-ita.
（以上 2 文、井上（2010）用例[3]）
今日はいい天気だ。
？ onul-un coh-un nalssi-ta.
この子は大きな手だねえ。
？？ I ai-nun khu-n son-i-ney.（以上 4 文、井上/金（1999）用例[4]）

井上（2010）の指摘によると、「予定だ」のような体言締め文と「いい天気だ」構文とは異なるという。実際新屋（2014）の「文末名詞」は「いい天気だ」構文をなるべく含めないようにしているように見受けられる。しかし本稿は、17 世紀の朝鮮語と日本語においてその実態を広く見渡すため、さしあたり区別せずに扱うこととする。

現代韓国語にも見られる構文であるから、17 世紀の朝鮮語にもあって不思議はない。実際、対訳を見ると少なからず存在が確認できる。また日本語においても、『源氏物語』などには現代語に直訳すると不自然に思えるくらいこの構文を見ることができる。よって 17 世紀の日本語（口語文）にあっても不思議はない。そのため、本書においてもごく普通に対応が見られることが予想される。

3）原文のハングルをローマナイズした（Yale 式）。
4）ローマナイズは原文のまま（Yale 式）。

しかしもしも、日本語文に対応する朝鮮語訳において、文末名詞構文が直訳されていない部分があったのなら、わざわざ直訳ではない構文を取る理由がなくてはならない。例えば直訳だと微妙な不自然さがあったことが窺われる。どのような不都合があったのかは、正確にはわからないものの、実態を記述しておくことにする。

3　『捷解新語』における文末名詞構文の実態

作業の都合上、日本語文において文末名詞構文を書き抜き、対応する朝鮮語訳がどのようになっているかを検討する。従って、逆に日本語文においてこの構文が取られていないのに朝鮮語訳が文末名詞構文になっているものは対象外となる。

必要のある場合ローマ字にて原文を記す。ローマ字転写は原則として河野六郎 1947 年式に基づく。但しイウン（ㅇ ㅇ）は区別せず、音節頭は「'」[5]、音節末は「ŋ」[6] で転写する。音節の切れ目（ハングル１字１字の切れ目）を「-」で表記する。

日本語の仮名は濁点を付す。音注により鼻音で濁音が明示されているもののみに濁点を付し、他は疑問例も含め清音字のままとする。但し「ㅂ」(b) は濁音とする。ハ行音は「ㅎ」(h) によって表記されているからである。並書表記によって促音を表したと思われるものは、「ッ」を補う。並書表記は時に清音を表したかと思われるところもあるので、「ッ」を補うと異様になるが、一々を判断しない。但し「ㅉ」(jj) は原則促音なしの清音とする。単に破擦音の「つ」を表したと思われるからである。引用の「と」(ㅌ) も促音なしの清音とする。

原文の日本語は「を」字を用いず助詞もみな「お」を用い、助詞の「は」も「わ」を用いているが、改めない。

その他ルビなどの形式で注を加えることがある。

必要のある場合（　）内にグロスを日本語で付す。他書の訳文や辞書から参考になる記述を引用する場合もある。

・尊：尊敬語

・謙：謙譲語

・丁：丁寧語（恭遜法）

5）河野［1947］は「ㅇ」(子音ゼロ) に対し「'」(逆向きのアポストロフィー；左引用符) を用い、アポストロフィーは別の子音字に用いているが、本稿では入力上の都合により「'」を用いる。なお河野［1955］ではアポストロフィー及び ŋ である。

6）河野と違い、もし「ng」なら「ㄴㄱ」の連続である。

・助：その他の終助詞や接続助詞

・現在：現在辞

・未来：未来（推量）辞

・連用：活用語の連用形相当の形態

・副：派生副詞形（－’i）

・連体：活用語の連体形相当の形態

・終止：活用語の終止形相当の形態

・名詞形 m：派生名詞化語尾（-m）

・福井：福井（2014）

・小学館：『朝鮮語辞典』小学館

・室町：『時代別国語大辞典室町時代編』三省堂

・京大索引：『捷解新語』京都大学国文学会（附載の国語索引）

3-1　日本語の連体形を連用形で訳したもの

(1-1)　さてめでたいくだりでごッそ[7] 御ざれ：

’e-’oa-’a-rɐm-da-’i-’o-’ɐb-si-do-soi　一２オ

（ああ-美しい副-来る-謙-尊-丁）

(1-2)　さてさてあきれたおしらるやうかな[8]：

’e-’oa-’’e-’oa-’e-hi-’eb-si-ni-rɐ-sim-’i-’ia　四 11 オ

（ああ-ああ-あきれる副-話す尊-名詞形 m-だ-助）

(1-3)　さてさてあきれた御そうぶんで御ざる：

’e-’oa-’’e-’oa-’e-hi-’eb-si-’a-ra-giei-si-’oa　四 23 オ

（ああ-ああ-あきれる副-知る連用-いらっしゃる-謙；福井：本当にあきれたお考えです）

(1-4)　御（ご）たいぎな御（おん）わたりて［で］（ママ）こッそ御ざれ：

siu-go-ro-’i-gen-ne-’o-si-do-soi　五６オ

（大変副-渡る連用-来る-尊-丁）

(1-5)　さんしお申うけてのあいさつなり：

7）係助詞「こそ」はなぜか「ゴッソ」相当の音注の付されているものがある。そうでないものもあり、本書では揺れが見られる。

8）「おしられやう」あたりが期待される。「ni-rɐ-sim」全体で「おっしゃること」相当の名詞派生形である。

三使 rɯr-請 hɐ-'ie-siaŋ-jieb-hom-'i-ra　六 1 オ

（三使-を-請する連用-相接する-名詞形 m-だ終止）

(1-1)(1-2)(1-3) は形容詞ないし否定存在詞の副詞形が用いられており、日本語の「連体形＋文末名詞」構文とは食い違っている。それぞれ連体形であれば「'a-rɐm-da-'i」は「'a-rɐm-da-'un」、「'e-hi-'eb-si」は「'e-hi-'eb-sɯn」が期待される。更に (1-1)(1-3)(1-4) は完全に「連用＋用言述語文」となっているが、(1-2)(1-5) は「連用＋体言述語文」という不一致を見せている。後者は名詞述語文であっても連用成分を取ることができたのであろうか、翻訳の間違いなのであろうか。

いずれにしても、これらの諸例において、日本語の文末名詞文を直訳した表現が取られていない。後に見るように直訳された表現も多数見られるので、やろうと思えばできたと思われる。例えば (1-2)「あきれたおしらるやう」は、後掲の (5-7)「御ねんごろなおしらるやう」とほぼ同じ構文であるが、後者はきちんと「連体形＋名詞」構文で訳してある。従って上の諸例においてそうなされなかった理由は詳らかでないが、ここに報告しておく次第である。

3-2　一語の派生名詞形

(2-1)　御ことばせつがききごとでごっそ御ざれ：

mal-sɐm-gies-ci-dɯl-'em-jɯg-hɐ-'oi　一 4 オ

（お言葉-脇-が-聞く名詞形[9] -m-相応しい-謙；福井：お言葉の端々が聞きごたえあります；小学館：-m jig-ha-da……するにふさわしい）

(2-2)　さてさてあきれたおしらるやうかな：

'e-'oa-'e-'oa-'e-hi-'eb-si-ni-rɐ-sim-'i-'ia　四 11 オ

（前出。ni-rɐ-sim：話す-尊-名詞形 m）

(2-3)　たんたんにそうもならんやうすなれども：五 29 オ（-m jig-ha-da の例）

(2-4)　ひろうさばかずわのちの[10] きこゑんものぢやほどに：

ne-bi-gɐ-'ɯm-'a-di-mos-hɐ-mien-hu-'ɯi-dɯ-rem-jɯg-di-'a-ni-hɐ-ni　九 10 ウ

（-m jig-ha-da の例；福井：広く裁かなければ後の聞こえがよくないので）

9）「dɯl-'em」（聞くこと）は、現代なら「dɯl-'ɯm」に相当する。名詞化接辞「-m」の前の形としては異例と思われるが、本書ではこの形が見られる。

10）音注「nno」に見える。

(2-2) を除く3例はいずれも「-m jɯg-hɐ-da」という文法化形式が用いられている。現代ならば「-m jig-ha-da」という形態となる。「聞きごと」「ならん様子」「聞こえんもの」全体が用言の派生名詞形として訳されている。これは「-m jɯg-hɐ-da」という形式を用いて訳す際に特有の現象と見られる。(2-4)「後の～聞こえんもの」は現代日本語話者として不自然に響くかもしれないが、「聞こえんもの」或いは「dɯrem」が名詞であるから属格助詞「の」及び「'ɯi」を用いるのは理屈としては正しい。朝鮮語の発想が影響を与えたものか。

(2-2) の例は前出 (1-2)。(1-2) では「あきれた～おしらるやう」の関係としての挙例であり、本項では「おしらる～やう」の関係としての挙例である。しかし本文「おしらるやう」という形態が不審である。「おしられやう」等の単純な誤りであれば用例から除外される。

3-3　文末名詞抜き

(3-1)　かぜおまたしられうとある き[ぎ] でこ[ママ]ッそ御ざれ：

bɐ-rɐm-'ɯr-gi-dɐ-ri-rie-hɐ-sin-da-hɐ-oɐb-nɐi　五 13 ウ

（風-を-待つ-未来連用-する-尊-現在-終止-する-謙-現在-丁；京大索引「ぎ（儀）」）

(3-2)　この[11] おしらるやうすぢやほどに：

'i-ri-ni-rɯ-si-ni　五 30 オ

（このよう副-話す-尊-助）

ここでは日本語では文末名詞が用いられているにもかかわらず、朝鮮語では単純な用言述語文となっており、名詞が訳されていない。「待とうとしてらっしゃいます」くらいの意味である。「儀」「様子」などの抽象的な形式名詞は時に訳出しない方が意味を取りやすかったものと思われるが、後掲のように「やうす」は「様子」や「'iaŋ」として訳出されたものも少なくない。(3-1) において訳出されなかった理由として考えられることは、原著者が「き」と書いたものを、対訳文作成者が「儀」であると認識できず、大意を取るに留めたのではないかということである。同様に (3-2) においても原著者の原稿に何らかの損傷があるなどの不備のため、大意に留めた可能性がある。

以上のように「連体形＋文末名詞」構文は、時にその通りの構文として訳出されない

11）原文「この」の後に「やうに」などの脱文か。

例があった。しかし多くは朝鮮語においても「連体形＋文末名詞」構文として訳出されている。以下 3-4 と 3-5 に、「連体形＋文末名詞」構文をそのままに訳してある例を挙げる。

3-4　連体形のままで訳したもの（形式名詞）

(4-1)　なにッともさばきにくいやうすでこ(ママ)ッそ御ざれ：四 22 オ

(4-2)　おしらることばおきけば/いそがいんて(で)かなわんことぢやほどに：五 5 オ

(4-3)　そなたしゆのこたい[12]　がかねておくしッた[13]　やうすぢや：五 26 ウ

(4-4)　あだならんありかたきこととぞんじまるするが：六 2 オ

(4-5)　まかないしゆよりも御ねんごろなことで御ざる：六一 15 ウ

(4-6)　ましてかやうのところいかにもうけられんやうすぢやほどに：七 2 ウ

(4-7)　御(おん)れいにあまるやうすでごッそ御ざれ：七 3 ウ

(4-8)　くわしう申(もうし)まるせうずれとあるぎでごッそ御ざる：七 14 オ

(4-9)　じきにまいッてさうお申(もうし)いれとあるぎでこ(ママ)ッそ御ざる：七 18 ウ

(4-10)　あッちッからのう[14]　ゆうても/うけとるしぎでわないが：八 8 ウ

(4-11)　ことばでわつくしがたきいわいことで御ざる：八 15 ウ

(4-12)　御(ご)たいぎなやうすかたりつくされんことで御ざる：八 18 オ

(4-13)　しッても[15]/したがわれんことで御ざる：八 21 オ

(4-14)　御(お)れいみにあまることで御ざる：九 16 オ

(4-15)　みなねがうわ/りやうごくのためと申(もうす)ことで御ざる：九 17 オ

(4-16)　つねづねこりお[16]　くやむばッかりのわれお：九 20 オ

(4-17)　ことごとしゆ[17]　おかしいことでこ(ママ)ッそ御ざれ：九 21 オ

3-5　連体形のままで訳したもの（一般名詞）

(5-1)　けうわわたりさうなくもいきでもあり：一 8 ウ

(5-2)　たいせつの御(ぎよ)いぢやほどに：二 7 オ

---

12)「こたえ」

13)「臆した」

14)「どう言うても」

15)「どうしても」の意らしい。脱字あるか。

16)「これを」

17)「ことごとしう」（ことごとしゅう）

(5-3)　さかづきとりやうおみれば/いかうようこしめすさけで御ざる：三６ウ

(5-4)　きどくな御ざいかんと申（もうす）ほどに：三 12 ウ（室町：さいかん［才勘・才漢・才幹］）

(5-5)　このやうにかたじッけなき御（ぎょ）いぢやほどに：三 21 オ

(5-6)　つねの き（ぎ） やうぎおせんとするかたぎぢやほどに：五 26 オ（福井：常の行儀を優先させる気質なので）

(5-7)　御ねんごろなおしらるやうぢや：六２ウ（前出(2-2)参照）

(5-8)　いちいちちく せ（ぜ） ん と（ど） のの御ねんごろな た（だ） うりでごッそ御ざる：七７オ

(5-9)　さてさて御（ご）いんぎんなゑんせき て（で） こ（ママ）ッそ御ざれ：八 28 オ

(5-10)　けつ（ッ）くはづッかし[18]　しだいで御ざるに：九７ウ

(5-11)　おもいの[19]　ほかの御（ご）ちそうと申（もうし）：

sɐiŋ-gag-bas-sgɯi-御馳走 sbun-’a-ni-ra　九３オ

（思い-他-の-御馳走-のみ-ない（否定）終止；思いの他の御馳走にほかならない）

(5-12)　これがいちだんなりにくい御（ご）しよまうぢや：九９ウ

(5-13)　さてそなたわおもしろいひとぢや：九 19 オ

(5-14)　ばかすどうぐもなうてひとおばかすひとぢや：九 19 ウ

この中には井上（2010）の「「いい天気だ」構文」が相当に含まれているようである。つまり現代韓国語（朝鮮語）話者には不自然に響くものが、『捷解新語』においては直訳的に用いられていることになる。

3-6　その他

(6-1)　おがも[20]　とのためばッかりで御ざるほどに：

ciug-siu-man-’ui-hɐr-sdɐ-rɐm-’i-’o-ni　九６オ

（祝寿-のみ-為-する-未来連体-のみ-だ-謙-助）

「～ためばかり（だ）」という構文を文末名詞文のうちに入れるかどうかは迷うところであるが、念のため入れておいた。朝鮮語において「～の-ためだ」は「～対格-’ui-hɐ-da（為（い）する）」という動詞構文を取るので、これが文末名詞構文の形を取らないのは当然である。3-2 の「-m jɯg-hɐ-da」と同様、慣用的な語法に引かれて直訳が避けられた例である。

18）「はづかしい」が期待される。林（1997）参照。

19）音注「nno」に見える。不審。

20）「拝もう」

4　結語

以上、報告のみになってしまったが、『捷解新語』原刊本において日本語の文末名詞文が朝鮮語でどのように訳されているかを瞥見した。もっとも「文末名詞」の認定には迷う例も少なからず存在し、境界の画定の仕方によっては用例に出入りがありうる。しかしおおよその傾向は以上のようになろう。

井上（2010）の区別した「体言締め文」と「「いい天気だ」構文」の違いは、本書においては明確に見てとることはできない。同時代の朝鮮語（オリジナル）資料においても本書と同様の頻度で「いい天気だ」構文が用いられているのか、それとも日本語に引きずられて直訳されたものが混じっているのか、検討の必要がある。むろん、日本語ではそうでないのに朝鮮語において文末名詞構文になっている例がどの程度存在するかも検討する必要がある。これらは今後の課題である。

参考文献

井上優（2010）「体言締め文と「いい天気だ」構文」『日本語学』29-11

井上優/金河守（1999）「名詞述語の動詞性・形容詞性に関する覚え書――日本語と韓国語の場合――」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト　研究報告書平成10年度　Ⅱ』筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト（特別プロジェクト長　原口庄輔）

河野六郎（1979）「朝鮮語ノ羅馬字転写案」［初出1947］及び「朝鮮語」［初出1955］下中邦彦（編）『河野六郎著作集第1巻：朝鮮語学論文集』平凡社

新屋映子（2014）『日本語の名詞志向性の研究』ひつじ書房

角田太作（1996）「体言締め文」鈴木泰・角田太作（編）『日本語文法の諸問題――高橋太郎先生古稀記念論文集――』ひつじ書房

角田太作（2011）「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』1

林義雄（1997）「原刊本『捷解新語』におけるシク活用形容詞ウ音便形のゆれについて」『専修国文』61

福井玲（2014）「捷解新語初刊本のテキスト分析」『韓国朝鮮文化研究』13

福沢将樹（2012）「天草版平家物語と捷解新語――謙譲語を中心に――」『説林』60

森田武（1985）『室町時代語論攷』三省堂

李康民（1991）「『捷解新語』の成立と表現」『国語国文』60-12

李基文（1975）『韓国語の歴史』（村山七郎監修/藤本幸夫訳）大修館書店
朴真完（2013）『「朝鮮資料」による中・近世語の再現』臨川書店
京都大学文学部国語学国文学研究室（編）（1957）『捷解新語：本文・索引・解題』京都大学国文学会
油谷幸利ほか（編）（1993）『朝鮮語辞典』小学館
大阪外国語大学朝鮮語研究室（編）（1986）『朝鮮語大辞典』角川書店
劉昌惇（1964）『李朝語辞典』延世大学校出版部［1990 年八版］
室町時代語辞典編修委員会（編）（1994）『時代別国語大辞典室町時代編』三省堂
本研究は、科学研究費（課題番号：26370544）の補助を受けた成果の一部である。